小泉信三賞選評

不透明な社会のなかで

小川原正道（おがわらまさみち）
（慶應義塾大学法学部教授）

今回の応募論文のうち、「死と向き合う」をテーマにしたものが、多数を占めた。高校生は、祖父母を喪いやすい世代であること、同世代の自死などの報道に敏感であること、またとりわけ、新型コロナウイルスの感染拡大によって「死」がより身近な問題として捉えられるようになってきたことが、その背景にあったのではないかと思われる。

このほかのテーマも、「競争と助け合い」は、受験戦争にさらされる世代は自問することを避けられないし、「善を行うに勇なれ」は、日常生活から政治的な行動まで密接に関わるメッセージであり、「流言蜚語」は、インターネットやSNSで頻繁に飛び交っており、いずれも高校生の普段の生活と密接に関わる問題であった。

そんななかで、小泉信三賞を受賞した佐藤論文は、「競争と助け合い」をテーマとしたものである。文章構成力や語彙力が大変優れており、自らの体験を巧みに織り交ぜながら、社会学的知見を多角的に引用しつつ、競争社会における周囲からの承認の受け方、とりわけ愛〝的〟な関係性の必要性について説いていく論述は、読者を引き込む魅力を有している。「断片化された人間関係からのアジール」としての愛的関係を語る著者に、共感できる読者は多いのではないか。

次席の吉田論文は「善を行うに勇なれ」を主題とした論文で、第二次世界大戦時にユダヤ人を救った外交官・杉原千畝を模範としつつ、善を行おうとしてもできない場合、そこでは世間の目が弊害となっているという。日本人は特にこうした目に敏感である。しかし日本人には、勇気を教えとする武士道もあるとして、著者はその実践を説いている。

佳作二編は、いずれも「死と向き合う」をテーマとしていた。

田村論文は、祖父の死を経験した著者が、緩和ケアの対象にALSを加えるべきであると提唱している。緩和ケアの定義、歴史、その特長としてのチームアプローチなどについて丁寧に説明され、体験談と学問的な意味での緩和ケアの有意義性とが、有機的に連関して論じられている。

一方、松岡論文は、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の普及啓発のため作製されたポスターが批判を浴びたことをきっかけとして、人生会議の必要性を説く。ここでも、祖父の病に寄り添った著者自身の体験が、織り込まれている。ACPとは何か、その問題点とは何か、を論じた上で、患者の死後に生きる、残された人々への眼差しを含めて、人生会議の意義を強調する。

「死」が身近な問題となっている社会情勢のもと、私たちは真偽の定かでない情報のなかで不安を抱えながら暮らし、競争社会において、なお助け合いや善を希求してやまない。今回の受賞作品はいずれも、そんななかで自身や家族の体験を学問的知見によって理論付け、小論文という形に昇華することに成功した。こうしたたくましい高校生が、不透明な日本社会を支えていってくれることを期待してやまない。

小泉信三賞選評

ハイデッガーの豊作

荻野安奈（おぎのあんな）
（慶應義塾大学大学院文学研究科教授）

高校生は哲学と相性がいい、というのが今回の感想だ。殊に「死と向き合う」のテーマに寄せられた論文は、その手のものが多かった。光が強いほど影は濃い。生命力みなぎる年頃は、死に思いを馳せる時期なのかもしれない。

このテーマでハイデッガーを出す例が多かった。ハイデッガーは今旬なのか、それとも授業で扱っているのか？　いずれにせよ、消化して使いこなしている人がほとんどで、感心した。高い抽象思考能力に支えられた作品が数ある中で、佳作に選ばれた二点は具体的な身内の死から発想して普遍に至っていた。

「命を見つめる緩和ケア」の田村さんは、ホスピスでの祖父との交流で、ホスピスが「死」ではなく「生」の場所であるという気づきに至った。健康だけが「生」ではなく、死に寄り添った状態もまた人間の在りようなのである。その観点からＡＬＳ患者の緩和ケアの重要性を説いているので読者の胸に届く。

「人生会議を考える」の松岡さんは、人工透析の祖父と十年を過ごした。医療チームと家族の対話不足が「引っ掛かり」を残したことがＡＣＰ、通称「人生会議」、への関心に繋がった。人生の最終段階における意思決定には手間も暇もかかるが、死という「個人的なことでありながら、同時に社会的・文化的意味を持つこと」に向き合うのを可能にしてくれる。私同様、この作品でＡＣＰへの認識を改める読者は少なくないだろう。

小泉賞の佐藤君は「競争と助け合い」のテーマを選んで、見事な人生論に仕立てた。社会学の文献を多数、よく読み込んで使いこなしている。構築された文体に、たまに「生きてる」のような口語が混じるのは、むしろ高校生の等身大として好感を持った。

佐藤君は人間を「多様な面の総体」として捉える。様々な「場」で、その場にふさわしい自分を見せ、承認されることを求める。人によって自分を使い分けるやり方は、ある種の「冷たさ」を人間関係にもたらす。

対処法として、佐藤君は二つのあり方を想定する。相手の存在を全肯定する「愛」は、親子や夫婦の間でも難しい。そこで相手の一面を肯定しつつ、共感できない部分を「寛容」に受け入れる「愛〝的〟な関係性」を作者は提唱する。

先のアメリカ大統領選がまさにそれだったが、相手の全否定と非寛容が跋扈する現代、もっとも必要とされているのは寛容の精神ではないだろうか。そこに気づいた佐藤君は、すでに一人前のユマニストと言っていいだろう。

次席の吉田さんは「善を行うに勇なれ」を選んだ。「世間」の中で正しいと思われる一歩を踏み出す難しさが、丁寧に綴られている。「正しい」行いの基準が示されれば、さらに説得力が増すだろう。

小泉信三賞選評

正義感に動機づけられた論考揃う

権丈善一（けんじょうよしかず）
（慶應義塾大学商学部教授）

今年も三月に審査員で課題を決める時は、五つの課題に高校生がどのように応えてくるのかが楽しみだと皆で話していた。高校生は、私たちが想像もしなかった角度から打ち返してくれるからである。

五つの課題で、応募者総数の五六％と、最も多くが選んだのが「死と向き合う」であった。そこから二つの佳作、松岡灯子さん、田村萌映子さんの論文が選ばれた。

二人とも昨年のある出来事をきっかけに、祖父の死という身近な体験と重ね合わせながら、考察をはじめていく。

松岡さんのテーマは「人生会議を考える」である。人生会議とは、ＡＣＰ（Advance Care Planning）の通称として一昨年末に決められた名称である。それは、尊厳ある死（すなわち尊厳ある生）を実現するための「将来の医療・ケアについてあらかじめ考え、計画するプロセス、ないしそのプロセスにおいて患者の意思決定を支援する活動」である。昨年は、人生会議の普及啓発のために作製されたポスターに批判が集まる出来事があった。そこから論文がはじまる。ＡＣＰが生まれた背景を丁寧に追い、ＡＣＰの持つ思想性に共感を示した上で、ＡＣＰへの期待として、いのちの尊厳、人生への敬意を再確認していくことにつながるものになることを述べている。ＡＣＰは、その期待に応えることができるものであると思われる。

田村さんは、ＡＬＳ（筋萎縮性側索硬化症）の嘱託殺人の疑いで、医師が逮捕された事件をきっかけに、ＡＬＳ患者の苦痛を少しでも和らげることのできる対処法がないかと考えていくことになる。田村さんの祖父がホスピスで静かな死を迎えることができた体験を基に、ホスピスでＡＬＳ患者を受け入れることができないかと考察を進めていく。「死と向き合う」という課題に真摯に取り組む論文の構成が、評者たちの間で高く評価された。

「善を行うに勇なれ」という小泉信三先生の言葉をテーマに選んだ吉田朱里さんは次点に選ばれた。この課題から、杉原千畝、『菊と刀』、『武士道』とテンポ良く日本人論を展開し、「善を行うに勇なれは、私たち日本人にはるか昔から受け継がれてきた教えであり、行動理論として私たちの精神の柱になっている」ことを説いていく。そして、「正しい行いをする勇気ある自分自身が、自分の根幹の揺るぎない柱となり、その先の自分を支えてくれる」と論じる。彼女の母親のエピソードもあり、吉田さんの考えは、しっかりとした環境から生まれてきたものであることも窺わせてくれる。

「競争と助け合い」という難しい課題から小泉信三賞は選ばれた。佐藤遼君は、「負けたら終わりなのか？」という問題意識からスタートして、社会に対するフェアな向き合い方とはなにか、そして人々をその向き合い方に自然に水路づけられる人同士の繋がりのあり方とはなにかを、この論文のなかで問うていく。勝者が敗者の取りたかった席を奪って、敗者の存在を否定している現在の競争社会に対する正義感に導かれた論の展開は、小泉信三賞に実にふさわしい論文であるというのが、審査員一同の意見であった。

小泉信三賞選評

審査を終えて

須田伸一（慶應義塾大学経済学部教授）

今年の小論文コンテストは、新型コロナウイルス感染症の拡大が全国の高校生の学びに大きな影響を与えつつある中で募集が行なわれたが、昨年を上回る応募作品が集まった。ただし、課題別でみると課題４「死と向き合う」を選んだ作品が多数を占め、ここに現在の社会状況が反映されているように感じた。

さて、小泉信三賞には、課題２「競争と助け合い」を選んだ佐藤遼さんの作品が選ばれた。この作品は、競争社会に対してフェアに向き合うための拠り所として、「居場所」の確保と「愛〝的〟な関係性」の構築を提案している。佐藤さんは数多くの文献を参照しつつ、それらを自分の言葉で再構成し、説得的に論を進める能力が高い。加えて、巧みな言い回しで読者を引き付ける力ももっている。一つだけ注文すれば、「〈フェアな〉向き合い方」というときの「フェア」の意味を説明してもらいたい。

次席の吉田朱里さんの作品は、杉原千畝の実例、児童虐待という一般例からまず善を行うことに勇気が必要なことを説き、その後、なぜ善を行うことに勇気が必要なのかについて、日本文化論の視点から分析を行っている。「善を行うに勇なれ」という課題から、このように視野の広い分析がなされている点を高く評価したい。また、最後に「正しいと思うことを信じて行うことを繰り返すうちに、勇気がいることだったことも、躊躇なく行うことができるようになるのではないか」とあるが、これには小泉信三も同意するに違いない。

佳作となった田村萌映子さんと松岡灯子さんの作品は、どちらも課題４「死と向き合う」を選んだもので、メディアによる報道と身近な人の死が論文執筆のきっかけとなっている。田村さんの論文では筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）を緩和ケアの対象疾患まで広げることが提案され、関連情報が綿密に調べられている。ただし、診療報酬制度という国の政策に関わる問題なので、もう少し広い視点からの検討も欲しかった。

また松岡さんの作品は、アドバンス・ケア・プランニング（ＡＣＰ）についてよく整理されてはいるものの、論文の目的であるＡＣＰの「普及に向けて目指すべき方向性を探る」という部分が最後に半ば箇条書きの形で述べられているだけで物足りなく思った。この部分に裏付けとなる情報を盛り込むことができればよりよい小論文になったであろう。

今年の入選作品、特に小泉信三賞を受賞した佐藤さんと次席の吉田さんの作品は豊富な読書経験に支えられているように見受けられた。最近の人工知能（ＡＩ）の能力の向上は著しく、英語においては人間並みに高度で自然な文章を作る技術をＡＩは獲得したとされるが、論旨がはっきりした文章を書くには、やはり読書の習慣が欠かせない。コロナ感染症の広がりにともない外出機会が減っている今こそ、高校生諸君にはこれまで時間がなくて読めなかった本に挑戦してもらいたい。

小泉信三賞選評

歳月は人を待たず

早川浩（株式会社早川書房代表取締役社長・慶應義塾理事・評議員）

若者が自分の主義、主張を文章で表すことは生易しいことではないが、将来必ず役に立つことである。なぜならば、社会に出ると公に所信を述べることが多くなるからだ。与えられた課題を自分なりに咀嚼し、文脈を考え、文献を漁る。それでも納得が行かなければ、先生、専門家に尋ねる。このような多角的な視座が大切である。

かく言う私は、在学中に社業を手伝いながら、岩田豊雄（獅子文六）、三島由紀夫、丸谷才一といった大作家から原稿を受け取ったり、座談会に立ち会うなどして、毎月警咳に接した。彼らの話はとても示唆に富み、後年私の大きな財産になっている。

さて、今年はコロナ禍にもかかわらず昨年を上回る三二〇篇の応募があり、最終候補にも水準が高い論文が出揃った。

小泉信三賞を受賞したのは佐藤さんの「競争社会を生きる〈つながり〉を構想する」。競争社会の中で無味乾燥になりがちな人間関係に、真の「つながり」を築きたい、という筆者の強い思いが伝わってくる。ともすれば抽象的で主観的になりがちな題材だが、自身の体験や同世代の実例を踏まえて論を進めているので、語り口は少し晦渋だが具体的で説得力がある。大人目線で距離を取って語られがちな課題を、自身の世代に置き換えて考察しているところに共感が持てる。

次席は吉田さんの「正しく生きるために～善を行うに勇なれ～」。日本人に「正しい行い」をする勇気が備わっているかという問題を、杉原千畝、ルース・ベネディクト『菊と刀』、新渡戸稲造『武士道』に言及しながら論じている。やや類型的ではあるが、日本の内と外からの視点を盛り込み、均整のとれた考察となっている。文章も読みやすくてよい。

佳作入選の田村さんの「命を見つめる緩和ケア」は、筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者への緩和ケアがわが国でも積極的に取り入れられるべきであるとの筆者の訴えが心に響く。ネットや書物で調べたことだけでなく、緩和ケアを受けて癌で静かに逝った祖父の挿話を入れたことで、結論に厚みが増した。なにより患者やその家族の立場に立って考察を進める姿勢を評価する。

同じく佳作、松岡さんの「人生会議を考える」は、「死と向き合う」という難問を、人生最期の医療を家族で考える運動に光を当てることで、まとまりのある論文になった。さらにもう一歩踏み込んで、その普及や啓蒙のための提言があればさらによくなった。

最後に、中国・東晋の詩人、陶淵明（陶潛）の詩を引いて本稿を締めくくろう。

盛年　重ねて來らず
一日　再び晨なり難し
時に及んで　當に勉勵すべし
歳月は　人を待たず

さて来年はどんな素晴らしい論文にお目にかかれるか、今から楽しみである。